

地域医療を支える要は連携の強化。 医師会や他院と築く “チーム医療”が地域を救う。

総合病院 山口赤十字病院長 末兼 浩史



新病棟建築、電子カルテ導入など 進化し続ける山口赤十字病院

当院は、令和2年に100周年を迎え、次の100年に向けて歩み始めたばかりです。私はそのちょうど100周年を迎えた年に院長に就任し、就任と同時に発熱トリアージ外来・E4・病棟の改装やホームページの改定などいくつかの目標を設定しました。現在は、建物の老朽化に伴う病棟の再編成を行っており、新病棟の建築、旧病棟の改修・解体、外構整備等、2024年の完了に向けて着々と工事を進めています。また、2019年の電子カルテ導入を皮切りに進めていたIT化にも力を入れるなど、ハード面・ソフト面の双方において、地域の皆様により良い医療が提供できるよう日々改革に取り組んでおります。しかし、院長就任と時期を同じくして拡大し始めた新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、100周年記念事業はおろか、医療現場にも数々の困難が生じているのが現状です。新型コロナウイルス感染症対策本部を立ち上げ、毎週の対策会議を継続しながらという、当初は想像もしていなかった困難の中にありますが、「人道」「公正」「積極性」の日赤精神を胸に立ち向かっているところです。

地域医療の中核的役割を果たすには 医師会や他院との連携強化が必須

当院は山口県中部に位置する総合病院として、急性期を中心とした地域医療の中核的役割



を果たすのが使命です。中でも、がん診断と内視鏡・手術・化学療法によるその治療、そして緩和ケア医療、また、周産期医療の推進や小児救急拠点病院、いわゆる特定疾患である難病の専門診療・治療が特色と言えます。また、赤十字病院の一つとして災害拠点病院としての役割を果たすことも重要な使命ですので、災害が起きた時には救護班が出動できる体制を整えています。とはいえ、全てを当院で完璧にできているわけではありません。例えば、これまでは、がん治療において、診断から治療、化学療法、緩和ケアまでワンピースで行えることを当院の強みとしてうたっていましたが、令和3年6月に緩和ケア内科医が退職し、現在は各科持ち上がりで、緩和ケア病棟で患者さんを受け持つシステムに変更し、どうにか緩和ケア部門の維持を図っている状況ですし、救急においてもいつも全てを受け入れられるわけではありません。こういった状況の中、地域の医療を支えていくには、やはり近隣の病院やクリニック、医師会との連携が必須となります。

あえて理念に盛り込んだ

「患者さん中心の地域連携」

院長に就任後に職員と意見を交換し、新たな

理念「わたしたちは、患者さん中心の地域連携に取り組み、あたたかな信頼のおける医療を提供します。」を掲げました。これまでの理念に「患者さん中心の地域連携」という言葉をあえて入れたのです。「患者さん中心の地域連携」はごく当然のことではありますが、患者さんを中心に据えることを第一に、そして、そのために地域連携のさらなる強化を図り、地域の皆様へより充実した医療サービスを提供するという、確固たる信念を改めて理念にて表したいと考えたからです。地域連携とは具体的に言うと、医師会、近隣の病院やクリニックとの連携のことで、医療を地域で捉え、それぞれがそれぞれの得意分野やできることをしっかりと果たし、分担しなければならないこと、協力しなければならないことは手を結び取り組んでいくことです。その背景には、進む少子高齢化や医師不足に加え、病床縮小や再編統合という国による地域医療構想、医師の働き方改革などがあります。つまり、今後地域医療を支えていくには、地域連携は避けては通れない重要なミッションであることが明白なのです。

医師会や他院と手を取り、 ともに地域の医療を補完し合う

「継ぎ目のない安心な医療・介護の提供」を実現するために、医師会やかかりつけ医、回復期・慢性期を担当される病院、介護施設や訪問看護ステーション、保健所、行政などとの連携は必須となります。特に、近隣の済生会山口総合病院、防府市の県立総合医療センターとのパートナーシップの強化は重要で、それぞれの得意分野を活かしながら、ともに地域の医療を補完し合いたいと考えております。現状を申しますと、山口市内の小児科診療、婦人科診療は当院に限定されているため地域の中心的役割を果たしているほか、地域の中では他院にない消化器・炎症性腸疾患診断、貴重な呼吸器内科・膠原病内科、

神経難病などの専門診療、緩和ケアを含む幅広い骨太のがん診療も当院の得意分野とし、これらにおいても中心的役割を担っています。また、医療圏を超えて、山口県北部の萩市や隣接した美祢市、島根県津和野町からも多くの患者さんがいらっしゃるのも当院の特色と言えます。一方、済生会山口総合病院には特化した心臓外科・ICUがあるため、急性心筋梗塞など循環器疾患・緊急は依頼しています。また、白血病など専門性の強い血液疾患の治療は県立総合医療センターへ紹介依頼しています。これらの特色を活かしつつより充実した医療を地域に提供するには、今一度役割分担を整理・明確化し、山口・吉南・防府医師会、地域内2・3次救急病院との情報共有が急務となっています。しかし、長引くコロナ禍によりなかなか進まないのも現状であり、大きな課題として我々に重くのしかかっています。

医師の確保やIT化など 解決すべき課題は山積み

地域連携以外にも、医師の確保やIT化、新病棟移行に伴う病床縮小への対策、経営基盤の安定強化など当院にはさまざまな課題があります。本来なら課題解決に向けて大鉈を振るべきところですが、コロナ禍の影響により、中断せざるを得ないもの、取りかかれないものも多数あります。現在、当院は新型コロナウイルス感染症の入院協力医療機関として中等症から軽症相当、無症状の患者さんに対応しております。これがいつまで続くのか、この先何が起こるかわからない状態の中で、医師・看護師らをはじめとする職員たちは皆さん必死に持ち場を守ってくれています。また、この新型コロナウイルス感染症は、本来受けるはずの健診を受けなかったり、本来受けられるはずの治療が先送りになったりと、地域の皆さんの受診や治療にも大きく



影響しています。実のところを申しますと、今は純粋な診療報酬ではなく、新型コロナウイルス感染症対策による補助金で経営が成り立っている医療機関の方が多くなっているのが現実なのです。しかし、補助金なしでも経営できる盤石な基盤を築くことは、どの医療機関においても絶対に避けられない課題です。なぜならコロナ禍が過ぎ去った先にも、私たちには地域の皆さんの生命と健康を守る責務があるからです。当院の場合は、電子カルテの導入や健診部門のインターネットによる予約の推進など、できることから着実に改革を進めています。医師の確保に関しては、チーム医療の推進や人材評価・育成の見直し、タスクシェア、年次有給休暇取得推進などより快適に働ける環境づくりを進めているほか、職員による動画作成など広報活動も行なっています。

どんな時代でも変わらないのは 地域の方々の生命と健康を守ること

先が見えないこのコロナ禍において、今後のビジョンや方向性が非常に描きづらい状況ですが、そんな中でも当院では変わらず持ち続けて

いるものがあります。それは「わたしたちは、苦しんでいる人を救いたいという思いを結集し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守ります」という日本赤十字社が掲げる使命です。いつの時代にあっても、どんな時代にあっても、患者さんを中心に据えた医療を全うすることこそが当院の責務であり、その思いは創設以来100年間、脈々と受け継がれてきました。これから先の100年がどのような100年になるのかは想像もつきませんが、私としては明るい日本になっていて欲しいと願うばかりです。当院としましては、今後も基本方針に則り、赤十字の心「人道、公正、積極性」をもって良質で温もりのある医療を提供し、医療に関わる安全管理に最大の努力をし、災害時には地域の皆様の医療救護活動に努め、一人ひとりが活き活きと働きがいのある病院を目指します。健診部門の充実、疾病に対する不安の解消、高齢化に伴う介護や認知症への不安など、全てを請け負える病院となり地域の皆さんのお役に立てるのが一番の理想ですが、やはり当院単独では全てを成し得ることは不可

能です。だからこそ、今後も謙虚さと礼儀正しさを失わず、地域連携のより一層の強化に努め、邁進するのみです。間も無く病棟が新しくなり、これまで以上に受診しやすい環境ができ上がります。地域に開けた病院としてますます充実した医療を提供いたしますので、機会があればぜひ受診ください。



未来へのメッセージ

患者さん中心の診療をめざして



副院長・第一泌尿器科部長
(医療技術部長)

須賀 昭信

当院の泌尿器科は1977年に本永逸哉先生が山口大学から赴任されたのが始まりです。以後永田一夫先生、松山豪泰先生と引き継がれ、私が赴任したのは2001年です。山口大学泌尿器科のモットーは患者さん中心の診療であり、この教えにしたがって当院に赴任後は手術の技術を高める努力してきました。手術の腕を磨くことが患者さんのためになると考えたからです。そして2015年には副院長を拝命し、現在は衛生委員会など病院の内政を担当しています。病院のために慣れ

ない仕事をしながら、後輩医師に技術を教えるのが今の唯一の楽しみです。

さて外来から2階の手術室まで階段を駆け上がる途中に「人道」という文字が目に入ります。苦しんでいる人は分け隔てなく救われなければならないという赤十字の基本となる言葉です。ニュアンスは少し違いますが患者さん中心の診療と繋がるようなところがあるようにも思います。次の100年も患者さん中心で地域に根ざした日赤病院であり続けてほしいと願っています。

安心して暖かい医療が受けられる病院を



副院長・第一外科部長
(医療安全推進室長)

亀岡 宣久

1996年に山口赤十病院に赴任して四半世紀がたち、当院の100年の歴史の1/4に立ち会ったことになります。その中で、医療事故を経験し、現在は、医療安全に携わる立場となりました。医療は格段に進歩しましたが、高度化・専門化し、豊富な知識・高度な技術が求められるようになりました。また、医療に対する要求も年々厳しいものとなってきています。到底、ひとりですべてをカバーすることはできず、安全で高度な医療を提供するためにチーム医

療の大切さが認識されるようになってきました。チーム医療の質の改善を図るための大切なことの一つに、コミュニケーション能力の向上があります。医療者間のみならず、医療者・患者間のコミュニケーション能力を高めて、医療事故や医療紛争をなくし、当院の理念である、患者さん中心の地域連携に取り組み、あたたかな信頼のおける医療を提供できる病院を、今後とも目指して努力を続けていく覚悟です。

成長よりもsurvival?



副院長・第一脳神経内科部長
(医療社会事業部長)

大堀 展平

創立当時の状況を考えると、今から100年後に当院がどうなっているのか全く想像が付きませんが、私が生きている可能性のある20～30年後のことは真剣に考えなくてはなりません。高齢化の波は少し収まってくるでしょうが、高齢者の数や割合は増大し、日本全体ひいては地球規模で高齢者の健康や生活をどのように支えていくかが大きな課題となっているはずです。私自身も自らの老いの問題と向き合いながら、若い人たちと共生しつつ持続可能な社会を

どのように作り上げていくのか、そして医療者としてこの問題にどう関わっていくのか、模索することになるでしょう。高齢化が進めば認知機能低下の問題にも直面せざるを得ません。“健康”とはどのような状態を言うのか、必ず訪れる死をどう受け止めていくのか、COVID-19のようなパンデミックにどう対処すればよいのか、多くの人の叡智を集めながら、病院もこれからは成長よりもむしろsurvivalの道を探ることになりそうです。

赤十字の優れた看護実践を後世に



看護部長

大林 由美子

当院は、設立当初の大正9年から平成17年の間に看護師養成を行い、多くの卒業生を輩出しました。その間、幾多の戦禍と災害を経験し、赤十字の看護師はいかなる状況下にあっても人間の生命と尊厳を守るという人道の理念のもとに、看護職としての使命を果たしてきました。その志は看護師養成を終了した後も脈々と受け継いでいます。

少子高齢化、医療技術の進歩、価値観の多様化、IT技術の進展等、環境の変化は著しく、自然災害や新興感染症

への対応に迫られる今、まさに刻々と状況は変化し続けています。そうした変化が生じたとしても、先輩諸氏が様々な経験の中で築かれた赤十字の優れた看護実践は、時代の変化に関わらず、変えてはいけないものとして後世に受け継いでいきたいと思っています。

これから先も常に高みを目指し、時代の要請に柔軟に対応しながら、地域住民の皆さまの期待にお応えできるように看護の役割を発揮していきたいと思っています。

地域の皆様の信頼に応えていくために



事務部長

吉岡 達也

当院は、令和2年に創立100周年を迎え、来年(令和4年)10月には老朽化した南病棟に代わる新病棟をオープンする予定となっています。病院としては施設・設備を一新し、次の100年に向けた新たな船出を切ることとなりますが、この船出は決して順風満帆ではありません。

現下のコロナ禍にあって、入院患者の減少等により病院経営は圧迫され、さらには、新病棟建設に係る負債の返済や、日本赤十字社全体で進めている新たな給与制度への移行、国が進めている「医

師の働き方改革」への対応など、当院には、乗り越えて行かなければならない課題が山積しています。

当院が、引き続き、地域の基幹病院として、地域の皆様の信頼に応えて行くためには、職員が一丸となって、これらの課題を乗り越え、病院の安定的な経営と円滑な運営に全力で取り組んで行かなければなりません。地域の医療機関や住民の皆様方には、当病院に対し、これまで以上のご支援・ご協力を賜りますようお願いを申し上げます。

感謝、そしてこれからも幅広く貢献できる病院として



薬剤部長

尼崎 正路

100周年を迎え地域の皆様、関係医療機関、施設、行政、関係団体、関係業者ほか日頃からのご支援をいただき心より感謝を申し上げます。また、諸先輩方のご尽力の賜物とも感じております。

さて、私が入職して30年間と短い期間ですが、医療を取り巻く環境・技術も大きく変化し、薬物治療も進化して治癒可能な病気も増えてきました。様々な難題もありましたが、今は新型コロナウイルス感染症という危機に直面している中、すさまじいスピードで治療薬予防薬の開発がされています。また、医療全

体の進歩もさらにスピードアップし高度化するものと予測されています。当院には災害救護活動をはじめとして多職種協働の素地があり、今後も様々な職種・職員の力を結集して新しい医療から感染症などの難局まで対応し続けていけるものと信じています。

時代に合わせ病院の形もさらに変化が求められると思いますが、周産期から緩和ケアまで人生の様々な場面、幅広い分野において「あたたかな信頼のおける医療」を実践し、地域の皆様にご支持し続けていただけるよう努力していきたいと思っています。

組織概要

2020年11月1日現在

名 称	綜合病院 山口赤十字病院
開 設 者	日本赤十字社
開 設 日	大正9年(1920年)4月1日
所 在 地	〒753-8519 山口県山口市八幡馬場53-1
病 院 長	末兼浩史
病 床 数	427床(うちNICU:9床、GCU:6床、HCU:4床、緩和ケア病棟:25床)
標榜診療科及び	内科、消化器内科、腎臓内科、呼吸器内科、糖尿病内分泌内科、膠原病内科、循環器内科、
特殊診療科	脳神経内科、精神科、小児科、外科、乳腺外科、整形外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、気管食道科、放射線科、リハビリテーション科、歯科口腔外科、
付帯事業	麻酔科、緩和ケア内科 訪問看護ステーション

職員数

※()内はパート職員数で内数

●医師	73人	●言語聴覚士	4人
●研修医	7人	●歯科衛生士	4人(1人)
●歯科医師	3人	●視能訓練士	4人
●薬剤師	23人	●臨床工学技士	8人
●臨床検査技師	28人(1人)	●臨床心理士	1人
●診療放射線技師	16人	●看護職員	442人(32人)
●管理栄養士	8人	●事務職員	118人(14人)
●理学療法士	16人	●技能業務職員	94人(38人)
●作業療法士	6人	職員合計	855人(86人)

会議・委員会・チーム

- 病院管理会議
- 幹部会議
- 早朝幹部会議
- 業務改善(連絡)会議
- 経営戦略会議
- 医療機器 購入委員会
- 診療材料委員会
- 教育研修推進室 運営委員会
- 教育研修委員会
- 広報委員会
- 薬事審議会
- 情報システム管理委員会
- 医療サービス改善委員会
- 保険対策 委員会
- エネルギー管理委員会
- 医療社会事業部 運営委員会
- 訪問看護ST運営委員会
- 北病棟建設委員会
- 特定行為研修管理委員会
- 栄養管理委員会
- 透析機器安全管理委員会
- 院内がん登録委員会
- 輸血療法委員会
- NST委員会
- クリティカルパス委員会
- がん化学療法委員会
- 診療録管理委員会
- 図書委員会
- 手術室運営委員会
- 救急医療委員会
- 臨床検査適正委員会
- 救命委員会
- 移植医療委員会
- 糖尿病チーム医療委員会
- 医療機器管理委員会
- 緩和ケア委員会
- 治験審査委員会
- 倫理委員会
- 医療安全統括委員会
- 医療事故調査委員会
- 医療安全管理委員会
- 院内感染防止対策委員会
- 衛生委員会
- 防災・防火管理委員会
- 情報管理委員会
- 放射線安全委員会
- 褥瘡対策委員会
- 医療放射線管理委員会
- 医療ガス安全管理委員会
- 医療従事者の負担軽減対策委員会
- 医薬用外毒物劇物管理委員会
- 医療安全推進担当者委員会
- 臨床研修管理委員会
- 院内保育所運営委員会
- 互助会役員会
- 知っちょる会
- 退院支援推進会議

学会認定・修練施設等

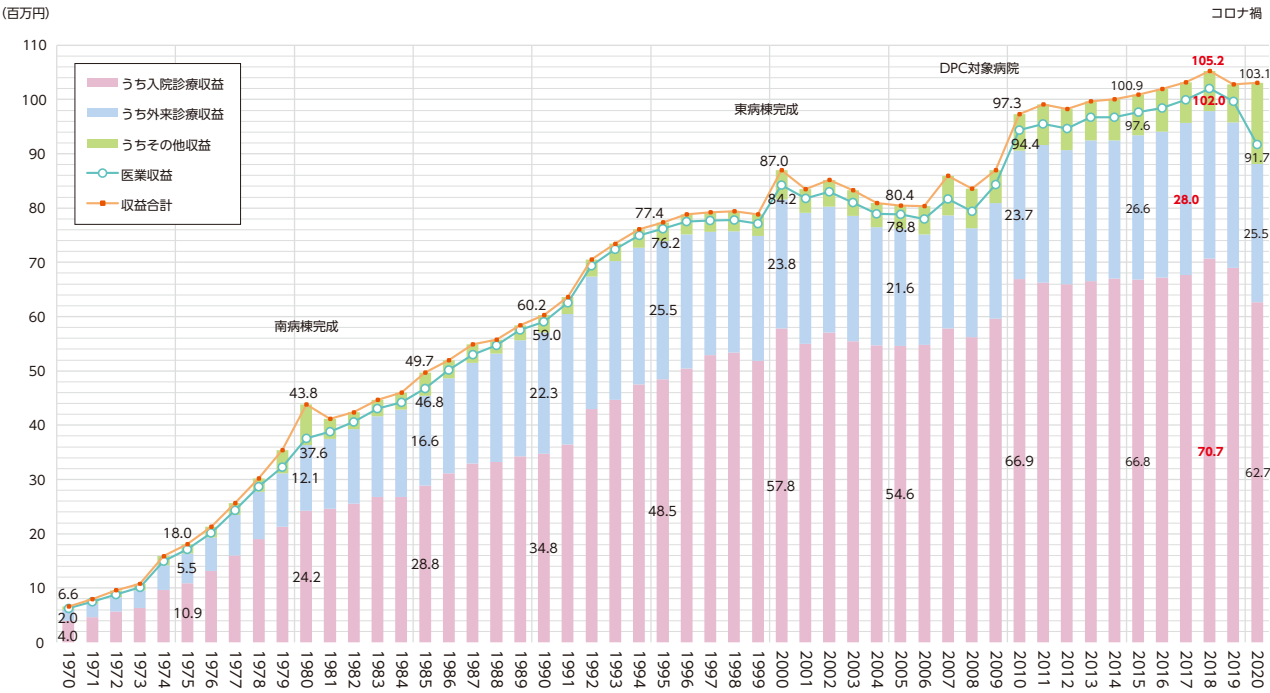
- 日本消化器病学会認定施設
- 日本消化器内視鏡学会指導施設
- 日本腎臓学会研修施設
- 日本呼吸器学会認定施設
- 日本内科学会認定医制度教育関連病院
- 日本リウマチ学会教育施設
- 日本糖尿病学会教育関連施設Ⅰ
- 日本神経学会専門医制度教育施設
- 日本脳卒中学会専門医認定制度研修教育施設
- 日本認知症学会専門医制度教育施設
- 日本循環器学会認定循環器専門医研修施設
- 日本超音波医学会認定超音波専門医制度研修施設
- 日本小児科学会専門医制度研修施設
- 日本小児循環器学会日本小児循環器専門医修練施設
- 日本周産期・新生児医学会周産期(新生児)専門医 暫定研修施設
- 日本外科学会専門医制度修練施設
- 日本消化器外科学会専門医修練施設
- 日本乳癌学会関連施設認定
- 日本整形外科学会専門医研修施設
- 日本脳神経外科学会研修プログラム(関連病院)
- 日本皮膚科学会認定専門医研修施設
- 日本泌尿器科学会泌尿器科専門医教育施設
- 日本透析医学会認定施設
- 日本産科婦人科学会専門医制度専攻医指導施設
- 日本周産期・新生児医学会周産期(母体・胎児)専門医 暫定認定施設(指定区分:基幹認定施設)
- 日本婦人科腫瘍学会専門医制度指定修練施設
- 日本がん治療認定医機構認定研修施設
- 日本女性医学学会認定研修施設
- 日本産科婦人科内視鏡学会認定研修施設
- 日本遺伝性乳癌卵巣癌総合診療制度機構連携施設
- 日本眼科学会専門医制度研修施設
- 日本耳鼻咽喉科学会専門医研修施設
- 日本医学放射線科学会放射線科専門医修練機関(認定部門:画像診断、IVR 部門、核医学部門)
- 日本麻酔科学会麻酔科認定病院
- 日本感染症学会研修施設
- 日本口腔外科学会認定関連研修施設

各種法律等に基づく医療制度指定・承認

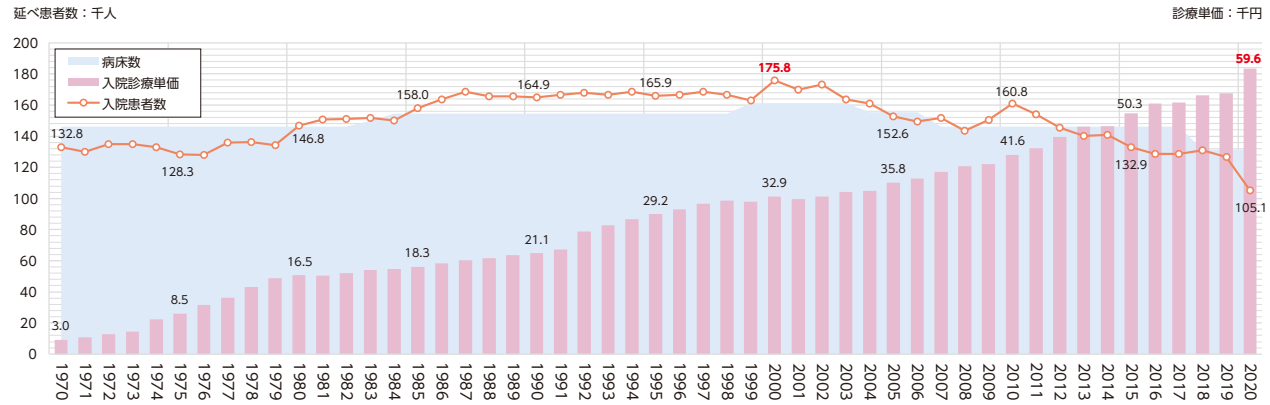
- 保険医療機関
- 労災保険指定病院
- 性病予防法指定病院
- 生活保護指定病院
- 原爆医療指定病院
- 更生医療指定病院
- 育成医療指定病院
- 公害医療指定病院
- 結核予防法指定病院
- 地域周産期母子医療センター
- 特定疾患治療指定病院
- 精神衛生医療指定病院(通院)
- 小児慢性特定疾患治療指定病院
- 自賠責後遺障害認定病院
- 母子保健法養育医療指定病院
- 児童福祉法医療給付指定病院
- 妊婦、乳児保険指導指定病院
- 人間ドック指定病院
- 救急告示病院
- 第二次救急医療施設
- 小児救急医療拠点病院
- 災害拠点病院
- 臨床研修指定病院(基幹型)
- 山口県DMAT指定病院
- 地域医療支援病院

経営関係データの推移

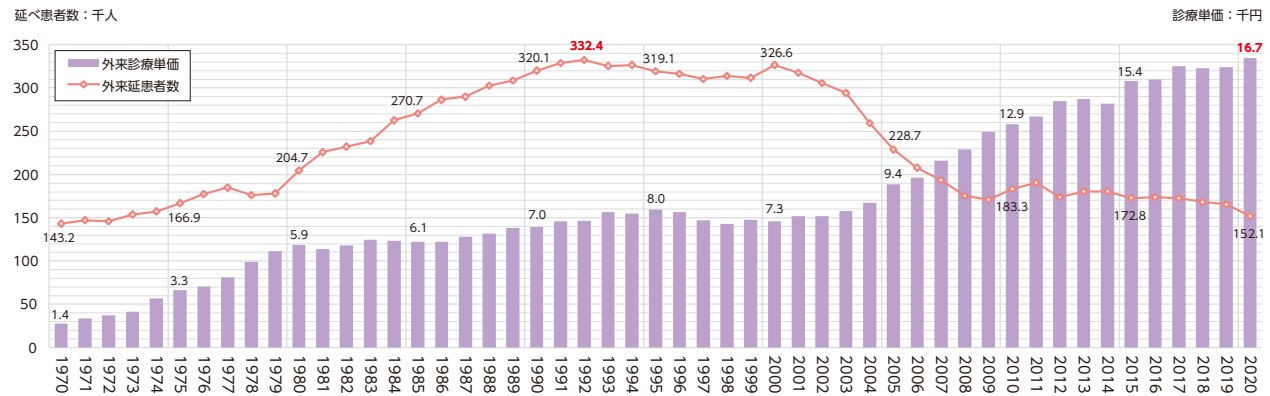
収益規模の推移(50年間推移)



入院患者数と入院診療単価



外来患者数と外来診療単価



編集後記

当院は、2020年（令和2年）4月に創立100周年を迎えましたが、その記念事業の一つとして「総合病院 山口赤十字病院100周年記念誌」を発行することになりました。

折り悪く、100周年に当たる2020年はコロナ渦に見舞われ、予定していた各種記念事業を中止せざるを得ない状況となりましたが、せめて自らの歴史や今の姿を後世に残すことが必要であるとの思いから制作を決めました。

この記念誌は、地域とともに歩んできた100年の足跡を刻むとともに、100年目の今やこれからの未来の姿を展望できる内容を盛り込みました。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な対応に病院全体で取り組む中での編集作業となり、予想以上の苦勞が伴いましたが、写真を多く盛り込み、当事者の言葉を散りばめながら、親しみやすく読みやすい構成に心がけました。

当院が地域の皆様に支えられながら今日に至った歩みや現在を通して目指す当院の未来をご理解いただければ幸いです。

最後に、本誌の発行にあたり、ご祝辞を賜りました行政機関ならびに地元医療関係団体、包括協定を結んでいる県立大学の皆様に心からお礼申し上げますとともに、制作に際し格別のご協力を賜りました大村印刷株式会社様に、改めて深く感謝申し上げます。

2021年12月
編集担当 総務企画課 國弘哲哉

100周年記念誌編集委員会

委員長	末兼 浩史〔病院長〕
委員	須賀 昭信〔副院長〕
	亀岡 宜久〔副院長〕
	大堀 展平〔副院長〕
	大林由美子〔看護部長〕
	吉岡 達也〔事務部長〕
	尼崎 正路〔薬剤部長〕
編集長	甲嶋 久慎〔事務部副部長〕

100周年記念誌制作ワーキンググループ

医師	須賀 昭信〔副院長〕
看護部	池田 早苗〔副部長〕
	岡崎恵美子〔東7階師長〕
	岡本 範子〔外来師長〕
地域医療推進課	濱村みゆき〔師長〕
薬剤部	平尾 郁〔係長〕
リハビリテーション技術課	阿部 寛〔理学療法士〕
放射線科部	渡邊美由紀〔放射線技師〕
検査部	河村 和也〔係長〕
栄養課	福重 裕子〔管理栄養士〕
	俣賀 智恵〔管理栄養士〕
医事第一課	高下 春信〔課長〕
医療支援課	鈴木 佳世〔ドクタークラーク〕
	竹村美智子〔ドクタークラーク〕
総務企画課（編集事務局）	甲嶋 久慎〔事務部副部長〕
	佐々木大地〔係長〕
	國弘 哲哉〔企画監〕
	富村布紗子〔主事〕
	上田 哲也〔事務職員〕

大村印刷株式会社